

人類を救うのは俺では
ないような気がする
/Apocrypha

甘味処アリス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

まず始めに、この小説は赤城九郎先生のFate／GrandOrderの二次創作である「人類を救うのは俺ではないような気がする」のさらに二次創作、三次創作になります。赤城先生に許可を取った上での投稿となります。

一部ネタバレがあります。ご注意ください。

死界魔霧都市ロンドンにて、ソロモン王の呪いを掛けられた一行。

一行の夢の中は、果たしてどんなふうになっているのか――？

目次

| | |
|--------------|----|
| 監獄塔に復讐鬼は哭く―― | 1 |
| 監獄塔に復讐鬼は哭く―― | 2 |
| 監獄塔に復讐鬼は哭く―― | 3 |
| | 18 |
| | 10 |
| | 1 |

監獄塔に復讐鬼は哭く——1

何かに、睨まれたことを憶えている。

その視線が、自分を守る多くを貫いて、何かを与えたことを分かっている。

その因果だけを理解して、ぐだ男はまどろみの中にいた。

そこが今まで巡った多くの場所の、そのいずれとも異なる、全てを足しても及ばぬほどの悪意が満ちていた。

ただ一重に、人が人を苦しめるためだけの、悪意に満ちた世界があった。

「目を開けたか」

そこには、男がいた。

誰かが、自分に話しかけていた。

「目を覚ましたか」

その、黒い影に輪郭を与えたような男が、稲妻を放つような激しさを秘めた男が、一人で彼に話しかけていた。

死だけが救いであり、脱出となるこの監獄で、幸運にも如何なる苦痛も受けないぐだ男に、彼は静かに語り掛けていた。

「さて、お前には二つの自由がある。一人でも奮戦するか、助けが来ると楽観してこのまま寝て待つという選択肢だ」

その勧めに、優しさはない。

ただ無情を知った上で、なにも諦める気がないという強固さを感じさせる。

「お前は幸運にも、その責務を一人で背負っているわけではない。或いは、都合よく救世主様が助けに来てくれるかもしれない。或いは、他のマスターが助けにくるかもしれない」

ふと思いつかぶのは、誰かがいた、という記憶の影だった。

自分には従ってくれる力強い影があった。

自分と一緒に責務を負う誰かがいた。

自分が、自分達が何をしようとしていたのか。自分たちは何者なのか。それはまるで思い出せない。

だが、明確に言えることがある。自分は一人ではなかった。

「お前がここで目覚めぬままに命を落としても、人理は救われるかもしれない。お前が信じていた輩だ、きつとお前という欠落も乗り越えるだろう。どうだ、楽に死ねば救われるぞ？」それがお前に向けられた慈悲…かもしれない」

それは、諦めることを勧める言葉だった。

その方が楽かもしれない。

なんとなく憶えているのは、圧倒的な存在。

今自分が置かれている状況を悪夢として、目が覚めたとしても。

自分が向き合わなければならぬ現実、解決しなければならぬ問題は。

きつと、この悪夢を脱するよりもよほど辛いことなのだろう。

いつそ、穏やかに息を引き取るべきなのかもしれない。

仮に目が覚めても……その先は、見ている方が疲れ果てるような、あきれ果てるような、惨いだけの道なのかもしれない。

結局、苦しんで苦しんで、苦しみぬくだけの日々なのかもしれない。

ならばいつそ……夢の中の無痛の死こそが、慈悲なのかもしれない。

「それはできない」

それを、ぐだ男ははねのけていた。

今日までの日々が楽だったわけではない。それぐらいは憶えている。

自分が抜けても諦めるような仲間ではない。それだつて分かっている。

自分が居なくても、何とかするかもしれない。

これから先に、楽しいことが待っているわけではないとも分かっている。

「ほう」

「人が待っている」

そうだった。

それが虚ろな影になってしまっても、確信していることがある。

自分を待っている人がいる。

自分が立ち上がって、一緒に苦難の道を歩むのを待っている彼らがいる。

自分を求めている彼女がいる。

きつと、泣いている。

自分がここにいるということは、自分が悪夢の中にいるということ。

彼女の手の届かないところに自分がいるということ。

きつと、彼女は自分を求めている。

うぬぼれかもしれない。

だが、それでも、もしかしたら、限りなくゼロに近かったとしても。

単なる錯覚であり、思い込みに過ぎなかったとしても。

彼女が泣いているかも…しれない。

その可能性を、自分は放棄できない。

「ならば、俺もつきあおう。七つの間に挑むがいい、悪夢から地獄に戻る男よ」

彼は微笑んでいた。

その選択肢を選んだ、自立している彼を、苦しむ道を歩む彼を喜んでいた。

「その選択を後悔しても、いつでもお前は諦めることができる……いいや、諦めないのか
もしれないがな」

未だに、悪夢を脱する道は遠く。

それでも、彼らは歩む。

監獄の塔の中を、脱出するために。

「待つ人がいるか……それがお前を動かす力なのだな」

「そうだ、それが仲間だ」

待て。しかしして希望せよ。

◆◆◆

頭がぼうつとするような、そんな不思議な感覚だった。例えるなら、夢を見ているよ
うなものか。——否、おそらく、自分は夢を見ているのだろうか。

「察しがいいな。その通りだ、マスター。確かに、お前は今、悪夢の中にいる」

少しづつ、頭がはつきりしてくる。悪夢の中にいるのに、目が覚めたような違和感を
感じる。

……このまま、彼についていっていいのだろうか。果たして、彼は本当に味方なのか

？ 覚めない夢の中、疑いが一瞬自分の脳裏をよぎる。

……だが。他に、道があるわけでもない。この道を進むしかないのだ。

「見ろ！ マスター!! 奴らは貴様を氣にくわないようだ！ 此処にいて尚、温かく脈動する貴様がな！」

彼は嬉しそうにそう報告してくる。此処ここ。此処とは、一体何処なんだ。そして、お前は一体誰なんだ。

そう思いつつも、襲ってくる死霊對抗するために自分の右腕に刻まれている令呪を発動しようとした。サーヴァントを、呼ぼうとした。

ジークフリート
彼を。

マッシュ
彼女を。

——そして、氣づいた。

右手の甲。本来あるべき場所に、赤い痣がなくなっていた。

夢だからか。それとも……。

襲ってくる死霊の爪を躲すと、次の瞬間、彼は一撃で死霊を殺した。

「一撃……！」

「ハハ、そう焦るな、マスター」

「……俺はマスターじゃない」

「では、こう呼んでおこうか？ 仮初めのマスターよ！ お前は知らなければならぬ。ここは何処か、オレは誰なのか！ 得られる情報は些細なものだろうよ……だが！ その中でも、学ばねばならぬことはある。例えば……そう、人間の醜さを——」

続々と、彼は周囲にいる死霊を屠っていく。その早さが、彼は並大抵の英霊ではないということを示していた。

「そんなことより、ここは何処でお前は誰だ！」

「此処は地獄。恩讐の彼方たるシャトール・ディフの名を冠する監獄塔！ そして、このオレは……英霊だ。お前のよく知っている筈のモノの一端だ。この世に陰を落とす呪いのひとつだ」

英霊……！

「哀しみより生まれ落ち、恨み、怒り、憎しみ続けるが故にエクストラクラスを以て現界せし者」

エクストラクラス……！ ジャンヌと同じ裁定者か！

俺がそう言った瞬間、目の前の彼は明らかに不機嫌になった。

「ルーラー……違うな。——そう、アヴェエンジャーと呼ぶがいい」

そう言うと共に、彼はその身を翻して松明たいまつに照らされた廊下を歩いていく。俺もそれについていくと、唐突に彼は語り始めた。

「死なぬかぎり——生き残れば、お前は多くを知るだろう。多少歪んではいても、此処はそういう場所だからな。だが、このオレが態々懇切丁寧に教えてやる義理はない」

そこまで言うとは、彼はこちらをチラリと振り向いて言った。

「オレはおまえのフアリア神父になるつもりはない。気の向くまま、お前の魂を翻弄するだけだ」

——フアリア神父？ 誰だそれは？

「フン。最低限のことは教えておいてやろう。手短にな」

俺が知らないことをアヴェンジャーの手間になると考えたのか、そこから色々なことを説明してもらった。

所長を含めた俺たちマスターの魂が魔術王の呪いによって、それぞれが『悪夢』に囚われていること。カルデアに一切の通信が取れないこと。

脱出のためには、それぞれが、サーヴァントによる手助けのもと試練を乗り越えなければならぬこと。

俺は七つの『裁きの間』を超えなければいけないこと。

裁きの間で死ねば実際に死ぬし、何もせずに脱出するハズの七日目を迎えても実際に死ぬこと。

マスター達は呪いによって悪夢に囚われていると言っていたが、彼女^{マッシュ}は？ カルデア

は？ 無事なのか？

そう問いたですと、アヴェンジャーは「はは。さあな」とだけ答えた。

——そして、扉の前で、彼は俺に問う。

「マスター。——人を羨んだことはあるか？」

監獄塔に復讐鬼は哭く—2

「マスター。人を羨んだことはあるか？」

「え？ 急に何を……」

「己が持たざる才能、機運、財産を目にしてこれは叶わぬと膝を屈した経験は？」

急に何を言いだすんだ、本当に。

「世界には不平等が満ち、ゆえに平等は尊いのだと噛み締めて涙に暮れた経験は？」

「そりや……」

「答えるな、その必要はない」

聞いてきたのはそつちだろ。

「心を覗け。目を逸らすな。それは誰しもが抱くゆえに、誰一人逃げられない」

それはそうだろう。世の中、誰しも劣等感を抱く。嫉妬する。完璧な人間なんて、いないんだから。

「他者を羨み、妬み、無念の涙を導くもの」

「嫉妬の罪」

そう言って、アヴェンジャーは扉を開いた。木製の扉が、ギギギという音を立てる。

「さあ、第一の『裁きの間』だ。おまえが七つの夜を生き抜くための第一の劇場だ」
裁きの間。越えるべき試練の一つ……！

「七つの間、それぞれの支配者がお前を殺そうと待っているぞ？　まずはその一つ目、味わうがいい！　その名は『フアントム・ジ・オペラ』！」

アヴェンジャーの奥には、特徴的な白い仮面と赤き血に濡れた鋭い爪を持つ男がいた。

フアントム・ジ・オペラ……それに、あの仮面。まさか、オペラ座の怪人!?　フランスで見えた、あのサーヴァントか!?

「然り。さすがにお前も知っていたか」

そう言うと、突然襲いかかってきたフアントムに対してアヴェンジャーは悠長に構える。

そして、フアントムの爪の一撃をアヴェンジャーは見切つて避ける。

「美しき声を求め、醜きもののすべてを憎み、嫉妬の罪をもつてお前を殺す化け物だ！」
「クリステイヌ……クリステイヌ、クリステイヌ、クリステイヌ!!」

フアントムは罅が開かないと思つたのか、標的をこちらに切り替えてくる。クソッ！

俺を標的に切り替えた途端、静止し、フアントムは唄い始めた。

「微睡むきみへ私は唄う愛しさを込めて

嗚呼 今宵も新たななる歌姫が舞台に立つ！

嗚呼 お前は誰だ きみではない クリスティーヌ!!

我が魂と声は ここに ひとつに束ねられる。即ち……」

そう唄って、ファントムはより苛烈にこちらに襲い掛かる。

俺はその攻撃を懸命に回避しながら、ギリギリの距離を置く。

ファントムは静止して唄っては攻撃、静止して唄っては攻撃を繰り返していた。

「私は欲しい 欲しい 欲しい

今宵の私はどうしようもなく……あまねく人々が妬ましい」

「よく見ておけよ、マスター。コレが人だ。お前の世界に満ち溢れる人間どものカリ

チュアだ！

戦え。殺せ。迷っている暇はない。なぜなら——」

アヴェンジャーが全て言う前に、ファントムは再び爪を振るう。

俺はそれを避けながら、アヴェンジャーの言葉を聞く。

「おまえがオレを信じようが信じまいが関係ない。奴は、問答無用でおまえを殺すからな！」

アヴェンジャーがそこまで言ったところで、気がついた。ファントム……首しか狙ってこない？

「ははは！ アレはどうやらおまえの喉をコレクションしたくてたまらんらしい！」

アヴェンジャーがそう言うと、ファントムは唄い始める。

「唄え 唄え 我が天使！」

今宵ばかりは 最後の叫びこそ 歌声には相応しい！」

「どうする？ 身を守るか！ 戦うか！」

「くそっ……戦う！」

「ならばオレの手を取れ！ 仮面の黒髪鬼に真なる舞踏を見せてやる！」

俺がアヴェンジャーの差し出した手を取ると、アヴェンジャーは笑顔で俺の前に躍り出た。

そして、ファントムの攻撃をわざと受け止める。

「ふん……この程度」

アヴェンジャーの光を纏った拳が、ファントムの顔を容赦なく射抜く。

ファントムは地面に爪を刺してブレーキをかけると、アヴェンジャーに向かっていく。

「フハハハハ!!」

アヴェンジャーは正面に向かって、光をその両手から放つ。

それはファントムの細い体に、霊核があったであろう胸に、大穴を開けていた。

一方的な蹂躪、宝具すら使っていない。これがアヴェンジャーの実力か……！
 その戦闘能力の高さに戦慄していると、アヴェンジャーはファントムを見下ろして言葉を発した。

「脆い脆い！ 哀れ、醜き殺人鬼になるしかなかったモノよ！ シャトー・ディフはおまえの魂に相応しくない！ おまえは殺人者としてはあまりに哀しすぎる！」

アヴェンジャーの言葉に、ファントムは最後の力を振り絞って唄う。

「時の果つる先より 光が 見える……この胸に、想いならざる大穴を開けるのか……」

おお 我が心臓よ はずこ

おお 我が心臓よ はずこ

クリスティーナ この心臓はきみに捧げよう

クリスティーナ この愛を きみへ」

「悲しい歌だ……」

クリスティーナへの届かない想いと、自らの負った傷を重ね合わせたのか。届かないと知ってなお、届けるべきものをなくしてもなお、届けようとするその歌はあまりに哀しかった。

「果たしてそうか？ よく聞け。あれは黒髪の殺人鬼が叫ぶもう一つの歌だ

我が恩讐の彼方よりの一撃は霊核を砕き、あれは最早砕けるまでだが、あの歌は、最

後まで続く」

しかし、俺の思いをアヴエンジャーは否定した。なるほど、確かにそんな見方もあるのかもしれない。

——けど、やっぱり。どこまでも続く歌は、霊基が滅んでも届けたいと思う歌は。悲しいと、そう思うのだ。

「クリステイーヌ 我が愛 わたしはきみを愛するが

クリステイーヌ 私は耐えられぬ

尊きはクリステイーヌ きみと共に生きる人々を

愛しきクリステイーヌ きみと同じ世界にあるすべてを

きみと過ごす人々を 朝陽の当たる世界を 私は 私は

「——時に 妬ましく思うのだ 狂おしいほどに——」

それは、心からの言葉だったように思う。ずっと好きな人と共にあれなかつた。ずっと地下に閉じ込められていた。だからこそ、願う。だからこそ、妬む。それが、どんなに些細なことでも。

浅ましい劣等感じゃない。自身の不遇でもない。その哀しい歌は、ただ自分がどれだけソレを大切に思っていたのか。どれだけソレが欲しかつたのか。それを、それだけを唄っていたのだ。

「さあ、第二の『裁きの間』へと向かうぞ！ 残る支配者が待つている！ 虎のように吼えよ。おまえには、すべてが許されているのだから」

「——待った。本当に、ここから出られるのか？」

——だが。どうしても。どうしても、アヴェンジャーに対する疑いを払拭しきれないのだ。

俺が疑惑の声をあげると、アヴェンジャーは馬鹿にしたように鼻で笑い、そしてこう答えた。

「おまえの疑念にはただ一言を以て返答するでしょう」

「——待て、しかして希望せよ、だ」

監獄塔に復讐鬼は哭く—3

「……マスター、予定変更だ。1週間かけてゆつくりと攻略するつもりだったが、そうも言ってられんようだ」

アヴェンジャーはそう言うと、マントを翻した。いきなりどうしたというんだろうか。昨日の戦いは、一昨日同様にそこまで大変なモノではなかった。——まあ、あの英霊には近寄りたくないけど。ぐだ吉の気持ちがよく分かった。

フアントムの次は勇壮な戦士——フェルグス・マック・ロイを攻略した。絶倫、勇壮、まさにケルトの戦士であることを謳われる戦士。アヴェンジャーによれば、俺もよく知るクー・フリーンの育て親だとか。

しかし、1日に一つの試練を攻略するのかと思いきや、いきなり脱出とは如何なものか。

とはいえ、置いていかれてもどうしようもないのでアヴェンジャーに追いつく。最近分かってきたが、アヴェンジャーはなんだかんだ言って親切だ。

昨日なんて「我がマスターは自己主張が薄い。自身の思うことはしつかりと言え」なんて言われたし。

——復讐者^{アヴェンジャー}なんて名乗ってるけど英霊のその本質は復讐者とは別の所にあるんだろう。いや、クラスはアヴェンジャーなのかもしれないけどさ。

試練の間の扉。その前で、アヴェンジャーはその怒りを煮え滾らせていた。もつとも、アヴェンジャーたる彼は常に怒っているのだけだ。そう意味では同じアヴェンジャーである副隊長のジャンヌも同じだろう。性格は全然違うけど。

試練の扉の間を開けると、見慣れた聖女——否、見慣れた聖女のオリジナルがそこにはいた。

フランスで俺たちを助けてくれたサーヴァント……つまりは救国の聖女、ジャンヌダルクだ。

「何をしに来た、裁定者！」

「決まっているでしょう。貴方達を救いに来たのです」

貴方達……つまりは、俺とアヴェンジャーの2人ともってことか。

俺はともかく、アヴェンジャーも……？

「復讐の憎悪。そんなものは掃き捨てるのです、アヴェンジャー」

「煩いぞ、そんなことは聞いていない！　なぜ、どうやってこの場所に来た！」

「ふむ……今は貴方はいいでしよう。それにしても……お久しぶりですね、ぐだ男」

そう言つて、ジャンヌは視線をアヴェンジャーから俺に変えた。

「——ああ、久しぶりだね」

「フランスの件ではお世話になりました。——さて。先ほども言ったとおり、貴方達を救いに来ました」

——待て。救いに来た？　つまり、彼女は「俺の夢の中」に入り込んできたということか？

「ええ。英霊化した副隊長と花園の魔術師によつて、連れてきていただきました。外と通信を取れば、出してもらえます」

「——無理だ」

ジャンヌの言葉に対して、アヴェンジャーは否定する。

「——貴様。いつの間に夢見る乙女になった？　オレの知るお前は幻想の救いを謳いながら現実を見ていたぞ？」

アヴェンジャーはそう言つて、その両手に閃光を伴わせる。

「——仮初めのマスターよ。貴様の見ているこれは全て『悪夢』だ。故に……これ以上は言わずとも分かるだろう。それともう一つ言つておく」

そう言つて、アヴェンジャーは一度息を吸い込み、吸つた息を出し切るように笑いながら叫ぶ。

「魔術王め、オレなんぞを選んだのが失敗だったな！　いつまでも貴様の手のひらで転

がされていると思うなよ！」

「さて、仮初めのマスターよ——待て、しかしして希望せよ。オレの名は巖窟王エドモン・ダントレス！ クラスはアヴェンジャー。お前を導き、そこな偽物の聖女とは違い真なる救いを与える者——この物語におけるフェアリア神父だ。貴様との3日間は、楽しかったぞ！」

そう言うと、アヴェンジャーはジャンヌに向かっていく。

ジャンヌは旗を使って対抗しようとしているが——その戦力差は歴然だった。

アヴェンジャーが潰したジャンヌの体の一部が泥のように溶ける。それはどこかで見たことのあるような、穢れそのものだった。

「世界の救恤を願う強欲！ 絶望の果てに全てを投げ出す怠惰！ 月の女神の寵愛を喰い散らかす暴食！ 本来は抱かぬ竜の魔女が如き憤怒！ そしてこの夢物の中語において主人公であろうと傲る復讐者の傲慢！ 貴様はその全てを乗り越えたに値する！」

アヴェンジャーが叫びながら破壊し尽くした偽ジャンヌの残骸を燃やしながらかぶ。「フェアリア神父として、貴様を導こう！ オレの死によつて！ 7つ目の試練の突破によつて道は開かれる！」

アヴェンジャーはそう叫ぶと、ジャンヌの残骸の側に転がるジャンヌの剣を握りしめる。

「本来他人の宝具など使えんが——宝具ですらない紛い物ならば別だろうさ。俺自身をこの監獄塔ごと焼き払ってくれる！ さあ、マスターよ、走れ！ 決して崩落には巻き込まれるなよ！」

アヴェンジャーはそう言うと、ジャンヌの剣を天に掲げてその剣の真名解放をした。

「アヴェンジャー！」

「立ち止まっている暇などないぞ！ 我がマスターよ！」

俺はアヴェンジャーに背中を押され、アヴェンジャーに指した方向へと走っていく。

崩落から逃げるように走り『外への扉』についた頃にはアヴェンジャーの見る影もなく、炎が燃え盛っていた。これが副隊長が前に言っていた、ジャンヌの自滅宝具なのだろう。

「——行くぞ」

俺は覚悟を決めて、扉を大きく開けた。その瞬間、景色は歪んで——。

気づけば、俺はカルデアのベッドの上に横たわっていた。

さっきまでのあれは確かに夢だったのかもしれない——けど。俺は、その夢を決して忘れることはないだろう。